大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

サミュエル・リチャードソンと手紙：『模範書簡集』(Familiar Letters)をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009919

サミュエル・リチャードソンと手紙
——『模範書簡集』(*Familiar Letters*) をめぐって——

近　藤　直　樹

I

サミュエル・リチャードソンという名を思い浮かべる時、その名を取り囲むように纏わり付いている手紙という概念を払い除けることはほとんど不可能である。リチャードソンに対しては、“letter-writer”というどこか不自然さが拭いきれない呼称も全く違和感なく自然に聞こえてしまう。リチャードソンと手紙は不即不離の関係にあるのであり、両者を切り離して考えるわけにはいかない。そのことを了解していたJ. ハイモアの筆になるリチャードソンの肖像画は、彼のずんぐりとした体軀と左手に持った手紙とが相俟って、その手紙が画竜点睛の如く利いて、リチャードソンの姿を彷彿とさせている。[1] この絵は、J. キャロル編の*Selected Letters of Samuel Richardson*[2]に口絵として採られているが、リチャードソンの書簡選集の口絵としてはまさに打って付けである。肖像画のリチャードソンが手にしている手紙は彼の肉体の一部となっているのであり、[3] それは書簡集に集められた手紙にリチャードソンの肉体性を付与する。手紙は手紙だけで自律的に存在しているのではなく、それを書いたリチャードソンがその手紙に手を触れて常に立っているのだ。生涯“letter-writer”

1）　J. ハイモアの娘スザンナにもリチャードソンを描いた絵がある。それは、リチャードソンが彼の取り巻き連6人を前にして自作『サー・チャールズ・グランディソン』を朗読している絵であるが、手紙と並んで、自作朗読もまたリチャードソンの気質を明瞭に映し出すモチーフである。

2）　*Selected Letters of Samuel Richardson*, ed. John Carroll（Oxford： Clarendon Press, 1964）.

3）　手紙（日記）をB氏から隠すために身体に巻きつけるパミラもまた同様である。

であったリチャードソンは手紙から離れて在ることはないのである。[4)]

リチャードソンは子供の頃から手紙を書くことが好きであった。そして我々がこのことを知るのも彼の手紙からである。リチャードソンは彼の作品のオランダ語翻訳者 J. スティンストラに宛てた手紙（1753 年 6 月 2 日付）[5)] で自らの生涯を簡潔に語っているのだが、その中で、“From my earliest Youth, I had a Love of Letter-writing” と述べた後、少年時代の手紙にまつわる興味深いエピソードを 2 つ披露している。最初のは彼が 11 才の頃、信心を装いながら中傷や陰口によって騒動を引き起こす 50 才近い未亡人に、匿名の諫めの手紙を出したこと。この手紙は筆跡がばれて彼の仕業であることが露見し、彼は母親からその行いの無礼さをたしなめられたが、それでも「母は私の徳義心はほめてくれた」とリチャードソンは自慢げに書いている。2 つめのエピソードはこのことから 2 年後の 13 才の頃、彼は 3 人の若い女性からそれぞれの恋愛について打ち明けられ、恋人への返事の代筆・添削を依頼された、というのである。教え諭す手紙と恋人への手紙。これらはまさに『模範書簡集』の中心を形成しているものに他ならない。そして、モラルと女性の美徳（virtue）が小説家としてのリチャードソン（彼は自分の作品が小説と呼ばれることを嫌ったが）のテーマとなっていることに通じている。これら 2 つのエピソードはリチャードソン像を実に鮮明に浮かび上がらせるものであり、それを書くリチャードソンは “letter-writer” たる才を備えている。あるいは逆に、“letter-writer” たるにふさわしいようにリチャードソンは生きた、と言うこともできるであろう。だが、いずれにしても同じことである。リチャードソンにとって生きることと書くことは一体となっているのだから。そのようなリチャードソンの根本にあるのは、何物にも屈することのないピューリタン的モラルに裏打ちされた、究極において自己肯定的な側面である。パミラやクラリッサにみられる不屈の自我、譲れない点では決

4） リチャードソンは自分が出した手紙の写しを保持していた。
5） *Selected Letters*, p.228–36.

して譲らない強い信念はその顕われである。リチャードソンも彼の主人公たちも自らの行動に信念と自信を持っているのであり、それと同じ信念と自信を持って、手紙を書くという行為を行っているのである。彼らは書くという行為によって道徳的自己を反芻しているのだ。

モラルこそリチャードソンにとって最も大切なものであった。先に挙げた2つのエピソードに続けて、学友たちによく「お話」をしたことをリチャードソンは述べているが、彼が何よりも強調しようとしているのは次のことである――“All my Stories carried with them, I am bold to say, an useful Moral.”またしても自信家リチャードソンである。殊に、単に“Moral”と書くだけではなく、それに“useful”と臆面もなく加えるところに得意気なリチャードソンの顔がちらついている。だが、リチャードソンがモラリストとして自らの道徳に、そしてそれを教示することに、揺るぎない確信と信念を堅持していたということは注目すべきである。彼が強迫的かつ偏執狂的ともいえる執筆・改訂作業を続行した動機も、道徳的意図が誤解されるのを放置できない強い信念に求められる。リチャードソンは実践的にして戦闘的なモラリストなのだ。その標榜する道徳がいかに不快で硬直したものであろうとも、彼がそれにあくまでも準拠していたということはリチャードソンを理解するのに欠かせない点である。

リチャードソンにとって行動の善悪の絶対的判断基準となるものは、極めて単純化して言うならば、ピューリタン・中産階級のイデオロギーである。貴族階級のそれとは「一本の線」ではっきりと分け隔てられたイデオロギーである。

> 思弁的真理の確実性については、万人が例外なく一致している。だが、もう一方の道徳的真理となるとどうだろうか。ひとつの川のこちらの岸からあちらの岸へ、ひとつの山のこちらの側からあちらの側へ、この境界のこちらの側からあちらの側へ、ひとびとは数学的な一本の線を越え

た途端に、白から黒へと移ってしまう。[6)]

これは、フランスにおけるリチャードソン賛美者の一人で、「リチャードソン頌」を奉げたディドロの初期の作品『懐疑論者の散歩』（1748年執筆）の中の無神論者アテオスがキリスト教徒に対して語る言葉である。「ひとつの川」とはライン川であり、ライン川を越えることは亡命を意味するが、リチャードソンにとってのライン川は彼の生きる社会に存在した。それは支配する論理が全く異なる2つの世界、貴族階級と中産階級、を峻別する川である。越えることを許されない川である。そして、その川を越えるということがリチャードソンの小説のひとつのテーマとなる。むしろ、両陣営の闘争がテーマである、と言うべきかもしれない。

それは『パミラ』（1740年出版）の場合を考えてみれば瞭然とする。B氏にとって小間使いにすぎないパミラを誘惑することなどは大したことではない。小間使いは主人の自由になるものだという考えがB氏にはあり、彼の属する紳士階級（B氏は純然たる貴族ではない）はその考えを許容している。ところが一方、パミラにとって操（virtue）は命にもかかわる一大事である。操に関することでは一歩も譲れないという断固とした拒絶をパミラは主人のB氏に面と向って口にする。[7)] これは個人の自由という意識が階級闘争を誘発する瞬間である。その時小間使いの側には2つの選択肢がある。すなわち、すぐに両親の許へ帰ってしまうか、それともパミラのように主人の屋敷にとどまって最終的に主人の正妻となるかのいずれかである。前者は貴族階級をはねつけることを意味し、後者は貴族階級を従わせることを意味する。パミラは自らの行動指針を棄てることなくB氏のそれを変革させるとい

6） 中川久定「曖昧さの領域――ディドロ歿後200年記念のために――」『思想』（岩波書店、1984年第10号）50頁。

7） 例えば、“Well may I forget that I am your servant, when you forget what belongs to a master.” あるいは “I am honest, though poor: And if you were a prince, I would not be otherwise than honest.” *Pamela* (Penguin Books) p. 55.

うラディカルな戦いに勝利したわけだが、そのようなことが容易に起こり得るとリチャードソンが考えているわけではない。パミラが例外中の例外であることを彼は強調するのである。しかも例外であるパミラでさえ堪え忍ばなければならないところもあったのである。ソロモン・ロウ宛の手紙（1749年1月21日付）の中でリチャードソンはこう書いている。

> It is apparent by the whole Tenor of Mr. B.'s Behaviour to Pamela after Marriage, that nothing but such an implicit Obedience, and slavish Submission, as Pamela showed to all his Injunctions and Dictates, could have made her *tolerably* happy, even with a *Refomed* Rake.[8)]

絶対的な服従がパミラの「高められた身分」に対する代償であったということである。「美徳の化身」たるパミラでさえ階級を越える代償は甚大なのだから、パミラならざる小間使いは主人から誘惑されたならさっさと両親の許へ帰るべきだ、というのがリチャードソンの基本的な教えなのだ。なぜならば、「改心した放蕩者は良き夫になる」という考えは一般に広く受け入れられているけれども実は危険きわまりない、とリチャードソンは考えるからである。[9)] つまり、『パミラ』よりもその執筆の契機となった『模範書簡集』138番及び139番の手紙の方が、リチャードソンのモラルのプロパガンダとしては正典である、と言うことができる。

8） *Selected Letters*, p. 124. この言葉の背後にあるのはリチャードソンの根にある男性中心主義の思想である。*Familiar Letters* の146番の手紙では、妻たる者の名誉は "meekness"、"condescension"、"forbearance" にあるとされている。*Familiar Letters*, ed. J. Isaacs (Folcroft Library Edition, 1974), p. 185. 以下本書からの引用はこの版による。

9） *Familiar Letters*, p. 85； *Selected Letters*, pp. 73, 94, 123； *Pamela* II (Shakespeare Head Edition) IV, 430 参照。

II

さて、リチャードソンは自作『模範書簡集』（1741年出版）をどのように評価していたのであろうか。このこともまたスティンストラ宛の手紙から知ることができる。彼はこの作品を全く評価してはいないのである。

> [T]he little Volume of Letters, to which Pamela owes her Being, is not worthy of it [your Notice].[10)]

作者がこう言っているからといって、我々もこの作品を無視してよい、ということにはならない。作者の言葉を額面通りに鵜呑みにすることは、往々にして誤りに陥いるもとである。まず注意したいのは、この手紙が既に彼の小説が熱狂的に世間に迎えられた後の1753年に書かれているということである。書簡体小説の技法を駆使して壮麗な細密画のような言語空間を『クラリッサ』において現出させたリチャードソンにとっては、『模範書簡集』はあまりにナィーブなものと映るであろう。それに、小説作品の出版に際して単に編集者とのみ表記して――それは手紙の実在性を装うための戦略であるが――編集者としての自らの名前を表に出さなかったリチャードソンの“shyness”や“native Awkwardness”も考慮に入れて上記の発言は解釈されなければならない。しかも改訂を行っているという事実もあるのだ。リチャードソンの『模範書簡集』の否定には大成した小説家としての自負心や内気な性向による心情的側面があるのであり、文学史において特筆されるべき『パミラ』を生んだと明言されている以上、『模範書簡集』はリチャードソンを理解するのに欠かせないテクストであることは明らかである。

リチャードソンが『模範書簡集』に着手したのはC. リビングトンとJ. オズボーンという2人の友人の熱心な懇請によるのだが、その懇請を聞き入れ

---

10) *Selected Letters*, p. 233.

たのは彼等の道徳的意図にリチャードソンが賛同したからである。リチャードソンの道徳的目的はこの書のタイトルに堂々と表明されている。例によって18世紀的に長いタイトルの全文はこうである——LETTERS ／ Written To and For ／ PARTICULAR FRIENDS, ／ On the most ／ IMPORTANT OCCASIONS. ／ Directing not only the Requisite ／ STYLE *and* FORMS ／ To be Observed in Writing ／ FAMILIAR LETTERS; ／ But How to ／ THINK and ACT *Justly* and *Prudently*, ／ IN THE ／ COMMON CONCERNS ／ of ／ HUMAN LIFE（字体は一部改変）。更にリチャードソンは自らの目的を序文で明らかにしている。

> . . . to inculcate the principles of virtue and benevolence; to describe properly, and recommend strongly, the social and relative duties; and to place them in such practical lights, that the letters may serve for rules to think and act by, as well as forms to write after.[11]

だが、手紙という方法で道徳的訓戒を垂れるのは何もリチャードソンの独創ではない。そのオリジナリティーの誉れをリチャードソンが誇っているのではない。また、たとえ『模範書簡集』が同種の先行するものよりも「より長く、より充実し、純粋に家庭内の領域にとどまりながらより多彩である」[12]としても、そこに盛られた道徳そのものに価値があるわけでもない。我々が興味を持つのは、道徳的教えを虚構のコンテクストを想定して書かれた手紙に

---

11) Preface to *Familiar Letters*, p. xxvii. ちなみに『パミラ』では出版の目的がタイトルページにこう記されている——PUBLISHED IN ORDER TO CULTIVATE THE PRINCIPLES ／ OF VIRTUE AND RELIGION IN THE MINDS OF THE ／ YOUTH OF BOTH SEXES（1801年版）。

12) Brian W. Downs, Introdution to *Familiar Letters* (Folcroft Library Edition), p. xxvi.

託すリチャードソンである。書簡体小説への道の出発点に立つリチャードソンである。

タイトルや序文からうかがえるリチャードソンの姿勢はかなり高圧的である。読者を教えるという意図が彼を説教壇の高みに登らせている。しかも教える相手として彼が対象にしているのは "the lower classes of people"[13] なのであるから尚更である。指物師の息子として生まれ、印刷屋の徒弟から叩き上げて国会関係の印刷物まで扱うようになった「成り上がり者」のリチャードソン、生涯スノビズムから脱することのなかったリチャードソン、実生活においてははにかみやであっても「ものを書く段になるとずうずうしくなる」[14] リチャードソンの本質がうかがえる。「高尚すぎる内容の手紙は削除した」[15] ともわざわざ述べているのである。

リチャードソンの階級意識を示す例をあげよう。『模範書簡集』の 130 番——「子供の教育を怠っている父親に」宛てられた手紙——である。それによると、子供の教育を怠れば彼らは "the dregs of mankind" の仲間に入ることになり、彼らのできる仕事といえば "mean and sordid employments" しかない、というのである。そして次のように続けられる。

> . . . they shall be confin'd to the drudgery of their own *servile station*, and will be intitled neither to *honour* nor *respect*, as they might have been, had they had an education to qualify them for more respectable business. And you will consider, sir, in a closer light, as to us who live in the *present age*, and in this *great city*, that there is hardly a *creditable* or *profitable* employment in London, where a tolerable knowledge of *accompts*, and *penmanship*, in particular, is not required.[16]

---

13) *Selected Letters*, p. 297.
14) *Ibid.*, p. 319.
15) *Ibid.*, p. 232.
16) *Familiar Letters*, p. 154.

社会的に成功したリチャードソンが子供の教育の重要性を説いているのだが、ここで注目したいのは“mean and sordid employments”の中に挙げられている“carpenter”という職業についてである。リチャードソンはスティンストラに書いている――“My Father's Business was that of a Joiner, then more distinct from that of a Carpenter, than now it is with us.”更に続けて、“His Skill & Industry, & an Understanding superior to his Business, with his remarkable Integrity of Heart & Manners, made him personally beloved by several Persons of Rank. . .”[17]とまで書き加えるのだ。指物師（joiner）と大工（carpenter）との間に殊更に身分差をつけ、指物師の父が「身分のある人」に愛されたことを得々と述べるリチャードソンの姿は滑稽ですらある。

もうひとつリチャードソンの階級意識を表わすものをあげよう。それは「施しをする身分」という意識である。『模範書簡集』の56番の手紙で父親が息子にこう書き送っている――“how much more noble is it to be in such a situation as shall enable you to *confer* benefits, than such an one as shall lay you under the poor necessity to *receive* them from others. . . .”[18]

「施しをする身分」はパミラが羨んだ境地でもある。パミラは施しをする喜びをB氏の母親の“almoner”として間接的に感じていたのだが、B氏と結婚して自分がそのような身分になった時、彼女はそれを神に感謝し、せっせと善行に励むのである。

リチャードソンの階級意識は貴族階級に対してだけでなく、自らが立脚するところの中産階級そのものに対してまで働いている。だが私はそれを槍玉にあげようとしているわけではない。リチャードソンに不快な面が多々あるにせよ、彼はピューリタンの立場から勤勉さ・道徳的行動を純粋に真摯な意図で推奨しているのである。『パミラ』の執筆のために中断していた『模範書

---

17)　*Selected Letters*, p. 228.
18)　*Familiar Letters*, p. 66

簡集』を完成させて出版したことは、出版人としてのモラルだけではなく、真面目なモラリストとして彼が抱いていた使命感の一端を物語る。勤勉で実直な努力による社会的成功・地位の上昇を説くリチャードソンは、貴族階級対中産階級という大きな社会的構造の中でとらえたなら、あくまで中産階級のための中産階級者としての思想的唱道者であり、代弁者であるのだ。もちろん、『模範書簡集』の目的が成功しているか否かはリチャードソンの言うように「誠実な読者の判断に委ねられ」[19]ており、それと同様に、リチャードソンの自己充足的モラリストの姿勢に共感を感じるか否かも読者の自由なのであるが。

III

『模範書簡集』は序文と173通の手紙から成っている。内容から分類すると、忠告・助言を主題とするものが最も多く全体の4分の1以上を占める。以下、単なる報告、非難、慰め等の手紙が目立つ。次に差出人と受取人との関係から分類すると、友人宛、恋人宛、姪からおば宛、父から娘宛、父から息子宛等の手紙がこの順で多い。しかしこうした分類を試みたところで大して意味をなさない。ただリチャードソンの関心・重点がどの辺にあるかを知ることはできるが、その点に関してなら先に全文を掲げた本書の長いタイトルから充分に察することが可能である。もともと『模範書簡集』は有機的構成が目論まれるような種類の書物ではない。そして既に述べたように、そこに込められた全体としての道徳的主張自体も詳細な分析を要するものではない。全体を構成する個々の手紙という形式が、マーク・ショーラーが言うところの「技法が主題を発見する」という意味合いでの「手紙」というものが、検討されなければならないのである。

まず、『模範書簡集』（*Familiar Letters*）というタイトルに用いられてる

---

19) Preface to *Familiar Letters*, p.xxix.

形容詞“familiar”については、ブラッドシェイ夫人がリチャードソンに書き送った次の言葉が格好の説明となるだろう。

> I own, in familiar letters, I think too severe a Correction is a great fault, for shou' d they not appear extempore, and just as the thoughts flow' d at the time of Writing?. . . As to Elegance, the very word *Familiar* takes off the Expectation. Simplicity has its Charm, and I would not aim at more.[20]

この意見はリチャードソンの小説を念頭に置いて述べられたものであるが、手紙というものについてのリチャードソンの考え方そのものを代弁していると思われる。「単純さ」を旨とするのは、手紙を書くことはコミュニケーション行為であり、その第一に達成されなければならないのは相手（読者）に理解されることだからである。リチャードソンが作品の改訂に飽くなき執念を燃やしたのは作品を「優美」——それはピューリタン的信条に反する——なものにするためではなく、単語ひとつに拘ってまでも意味をはっきりさせようとしたからである。取りわけ、中産階級に対するモラリスト・教育者を自認するリチャードソンにとって、理解されなければすべては徒労となる。「優美さ」によって訴えるのではなく、「瞬間に即して」「書き手の魂が高揚している間に」[21] 手紙が書かれることによって感動を伴って理解され、読者に対する効果は大きくなる、とリチャードソンは考える。「瞬間に即して書かれた」手紙に「優美さ」の入り込む余裕などないのだ。要するに、“familiar”なる特質はリチャードソンの持つ手紙の概念と自然に結びついているのである。

人々に教えを与える媒体は“familiar”であることが必要であり、リチャードソンの意識の上で“familiar”であることとつながった手紙はその媒体とし

20) J. Carroll, Introduction to *Selected Letters*, p. 32.
21) Preface to *Clarissa* (Everyman' s Library) I, xix–xv 参照。

て相応しい。それは新約聖書に根拠を持つ。新約聖書の多くは使徒（主としてパウロ）からの手紙という体裁をとっているのである。使徒が有している権威の幾分かをリチャードソンは引き受けようとしている。使徒がイエス・キリストの教えを説くように、リチャードソンはピューリタン的モラルを説く。リチャードソンの立場は使徒のそれとのアナロジーで考えることができるのである。あるいはこうも言える。『模範書簡集』に集められた手紙の書き手と想定されている“particular friends”が使徒であり、それらのペルソナの後ろに控えたリチャードソンは新約聖書におけるイエス・キリストの立場にある、と。このように言ったからといって、何も私は大げさなことを提唱しようとしているわけではない。これは、「作者は神か？」というありきたりの問題の変形にすぎない。教育という目的と手紙という形式が、リチャードソンとこの問題を、そして更に「作者の意図と読者の解釈」という問題を切り離せなくしているのである。

手紙という小宇宙においては、書き手の自我が統治者である。たとえ借金を申し込む手紙であろうと、旅先からの単なるたよりであろうと、書き手は手紙の中で自我を主張している。書き手の自由意志で自発的に書かれ署名され封印された手紙は閉じられた世界、書き手の自我が封じ込められた世界であり、受け手の解釈は自由であるにしても、書き手のアイデンティティーは歴然としており否定することはできない。このことはすべての書かれたものについて言えることなのだが、手紙の場合は原則的に他者に向けられた私信であり、書き手は受け手たる他者との関係を見据えた上で書いているのだから、新批評的に書き手を度外視して手紙それ自体を自律的なテクストとして解釈することはできない。手紙はコンテクストの産物なのだ。逆に言えば、手紙は何よりもまずコンテクストを創造するのである。だから、新約聖書の多くが「神の御旨によって召されてキリスト・イエスの使徒となった」パウロからの手紙であるという事実は大きな要素であり、無視するわけにはいかない。また、パミラやクラリッサの手紙は、置かれた状況の中で精一杯自己を貫いて生きる個人、アイデンティティーを失うことのない個人、というも

のを浮きぼりにする。そして、アイデンティティーを認めることは何がしかの敬意を払うことに通ずる。リチャードソンの手紙はすべてそこに照準を定めている。それが“letter-writer”たるリチャードソンの戦略なのだ。彼の意識では、手紙というひとつの独立した世界では書き手は絶対者なのであり、受け手は書き手に反応しなければならない。書き手が道徳的見解を述べたならば、受け手は書き手と同じようにアイデンティティーを持ってそれに反応しなければならない。手紙という小さな私的領域にそれを読む者は連れ込まれるのである。手紙という形式が道徳的教育という目的・主題を枠づけるのだ。

手紙は現実の社会において個人と個人の間を流通する「物」、個人に帰属する具体的な「物」である。「物」であるからには物質としてリアリティーを伴う。『模範書簡集』にあるのは架空の状況を設定して書かれた架空の手紙だが、手紙であるという点において具象性やリアリティーの影をとどめている。それが、手紙の直接性という属性や実用的内容とともに、読者として想定されている“the lower classes of people”に対して『模範書簡集』が説得力を発揮しうる要因となっている。それは同時に、リチャードソンが体現している「書く」ことの問題の根幹に係わっている。リチャードソンにとって、書かれた手紙の物質性（書かれた物という名詞的力）がフェティシュとなるだけでなく、手紙――私信であろうと作品を構成する手紙であろうと――を書くこと自体（書くという動詞的力）がフェティシュなのだ。

そもそも書くという行為は多かれ少なかれフォーマルなものであり、そのフォーマル性は常にフィクション性に傾斜するものである。いかなる書き手であろうとその事情は変わらない。他人に読まれないことを前提とした日記を書く場合でも、ペンを握って自己と向い合った瞬間にフォーマル性とフィクション性が侵入する。[22] 書くという行為に付随するこのフォーマル性とフィク

22）　パミラの日記がフィクションであるのは、真実を書いたと公言するルソーの『告白』と同じく、書かれたものが書き手の強烈にして恣意的な自我に染まっているからである。そして、それは文学性の源でもある。

ション性こそリチャードソンが排除しようと努めたものに他ならない。そのために彼が推し進めるのが、「瞬間に即して」“familiar”に書かれた、事実を述べる手紙である。「瞬間に即して」“familiar”に手紙を書くということは親しく話すように書くことであり、それは書くことが陥いるフォーマル性とフィクション性を軽減する手段となる。リチャードソンにとって手紙を書くということは、手紙という物質性に起因するリアリティーだけでなく、そこに書かれた言葉が忠実に現実を写し取って支配することができるというナイーブな言語観に起因する現実反映のリアリティーをも手に入れることになる。手紙のこのリアリティーがフィクション性と戦うためのリチャードソンの武器である。そのリアリティーを増殖させるためにリチャードソンは手紙を増殖し続ける。書き続けることが現実をつかむ唯一の方法であるかのように実に勤勉に書き続ける。[23] 勤勉であることはピューリタンの美徳であるからだ。[24] リチャードソンの登場人物が手紙を書き続けるのは、物語を進行させる必要性のために強いられた不自然な行為ではない。彼等はリチャードソンの勤勉さを体現しているのである。書くことはアイデンティティーの保持に有効であり、彼らは書くことによって生きていることの証しをたてている。そしてそのことは、彼らの創造者リチャードソンにそっくりそのまま当てはまることなのである。

リチャードソンの小説は非常に長いものであるが、それはその長さ自体をめざしたものではない。『クラリッサ』の初期の段階のマニュスクリプトに言及してリチャードソンは言っている。—— “[I] am such a sorry pruner . . . that I am apt to add three pages for one I take away!”[25] リチャードソンの弛ゆみなき書字行為は「怠けることは悪への第一歩」であるというピ

23) 文字に書きとめることによって初めて人は現実を我がものとして定位させることができる。リチャードソンにとって、彼の手紙はすべて現実をそのままに写し取った「真実」なのである。

24) 勤勉と神への信頼はリチャードソンの行動原理である。*Selected Letters*, pp. 174–75, 180, 233 参照。

25) *Selected Letters*, p. 61.

ューリタンの教えに基づいているのだが、彼は決して書くために書くのではない。彼は書くことによってリチャードソンたるアイデンティティーを確固たるものにしていくと同時に、道徳教育という大義を遂行しているのである。彼は常にその旗幟の下に書き続けるのであり、私信にしろ作品にしろそれは心底からの止むに止まれぬメッセージなのだ。だが手紙という形式がメッセージに相応しくとも、その内容が筆者の意図通りに受け取ってもらえるとは限らない。むしろそれはリチャードソンも認めるように、[26] あらゆる書物が免れないことではあるが、絶えず誤解にさらされていた。だからリチャードソンは私信で自らの意図を説明し続け、『パミラ』の続編を書き、改訂を死ぬまで繰り返すことになる。そのような行為が終わりのないものであるのは、書くことが本来倫理的で自らを律することである故に、書けば書く程リチャードソンは自らの大義に固執することになるからである。その極めつけが *A Collection of the Moral and Instructive Sentiments. . . Contained in the Histories of Pamela, Clarissa, and Sir Charles Grandison* (1755 年) である。そして、この書に到るリチャードソンの作家としての出発点は『模範書簡集』にあったのだ。リチャードソンはそれより先に *Apprentice's Vade Mecum* (1734 年) を出版しているが、彼を真に作家への道を歩ませることを決したのは『模範書簡集』である。

手紙という手法に聖書と『模範書簡集』のアナロジーが見い出せることは既に述べたが、両者の間にはもうひとつアナロジーがある。聖書からモチーフを得て数多くの文学作品が生まれたように、『模範書簡集』から『パミラ』が生まれ、『模範書簡集』の何通かの手紙にみられる現世を "probation" とみなす思想[27]は『クラリッサ』において完成された形で示されるのである。[28]

---

26) *Ibid.*, p. 316.

27) *Familiar Letters*, LV, LVI, LXV, CXII, CLXXII, and CLXXIII.

28) "A Writer who follows Nature and pretends to keep the Christian System in his Eye, cannot make a Heaven in this World for his Favourites ; or represent this Life otherwise than as a State of Probation. Clarissa I once more averr could not be rewarded in this World." (*Selected Letters*, p. 108.)

『模範書簡集』はリチャードソンの思想の根幹をなす人生教本である。リチャードソンはここから出発し、それ以降の小説作品においてホラティウス以来の伝統的な理念である utile dulci を実現すべく努力することになる。[29]しかし最後の小説『サー・チャールズ・グランディソン』は "A Man of Religion and Virtue" を「模範」として示すという前二作にもまして「高貴な」目的[30]のために生気の欠けたものとなっている。そして、utile であることを前面に押し出している点で『模範書簡集』——序文で "more useful than diverting" であることを心がけたと述べられている[31]——と共通するところのある *A Collection of the Moral and Instructive Sentiments* に到ったのである。これが utile dulci というアポリアをめぐったリチャードソンのひとつの到達点である。すなわち、リチャードソンの文学的人生は『模範書簡集』のまわりをめぐっていた、と考えることができる。[32] 本論のサブタイトルに「『模範書簡集』をめぐって」と掲げたのはそういう意味である。

Ⅳ

モラリストたる情熱の発露であるリチャードソンの書字行為は矛盾に満ちたものである。書けば書く程それだけ誤解の種をふやすことになり、フィクションの侵入を許すことになる。改訂は誤解を解くのとは逆の結果になることがあるだけでなく、「瞬間に即して書く」という自らが推奨する様式に背く

---

29) ". . . if we can properly mingle Instruction with Entertainment, so as to make the latter *seemingly* the View, while the former is really the End, I imagine it will be doing a great deal." (*Idid.*, p. 47.)

30) Preface to *Sir Charles Grandison* (Oxford Univ. Press),、 pp. 4 − 5.

31) Preface to *Familiar Letters*, p. xxvii.

32) 次のデフォーの言葉を参照——「そもそも、物語があってそこから教訓が作られるのではなく、いつの場合も、教訓があってそこから物語が作られるのである。」(山本和平訳『ロビンソン・クルーソー反省録』、講談社世界文学全集第 13 巻、516 頁。)

ことでもある。手紙の真正さをアピールするリチャードソンの小説の手紙は、そもそも虚構の人物によって書かれているのである。リチャードソンは書くことの矛盾に織りなされたテクスト生産者であるのだ。だから、自己充足的で安定した「作品」たることをめざしたリチャードソンの小説は、結果として読者を賛否両論に巻き込む闘争的「テクスト」となっているのである。そしてそのテクストはリチャードソンという個人と不可分である。

> I produce texts, therefore I am, and to some extent I am the texts that I produce.[33]

ロバート・スコールズは現代批評理論家に共通する公理としてこのように述べるのだが、リチャードソンはその先駆者であると言ってよい。しかも「ある程度まで」ではなく「かなりの程度まで」と言い換えることが可能である。リチャードソンとテクストは表裏一体なのであり、我々に与えられているのはリチャードソンというテクストなのだ。そのようなリチャードソンが現代批評理論家の関心の的となるのは蓋し当然と言わなければならない。

---

33)　Robert Scholes, *Semiotics and Interpretation* (New Haven and London : Yale Univ. Press, 1982), p. 4.